支援者が捉えた知的障害のある青年期女子の男女交際

岡田　久子　尾原　喜美子*

高知県立山田養護学校　〒782-0016　高知県香美市土佐山田町山田１３６１
＊高知大学医学部看護学科　〒783-8505　高知県南国市岡豊町小蓮

Male-female relationships among mentally-disabled adolescent girls as viewed by support staff

Okada Hisako　Ohara Kimiko

Kochi Prefectural Yamada School for Mentally Retarded Children Yamada 1361, Tosayamada-cho, Kami-shi, Kochi 782-0016, Japan

Department of Nursing, Kochi Medical School Kohasu, Okoh-cho, Nankoku-shi, Kochi 783-8505, Japan

要約

本研究の目的は、知的障害者に関わる支援者が捉えた知的障害のある青年期女子の男女交際を明らかにし、地域と連携した生きる力を育む教育への示唆を得ることである。①知的障害のある青年期女子が異性に関心を持つことやその場面に実際に関わってどのように思うか、②卒業後教育の必要性や進め方などについて、半構成的面接を行い得られたデータを質的に分析した。その結果、知的障害のある青年期女子の男女交際において、【リスクの大きい交際】が課題として根底に存在し、生きる力を育む教育において、【リスクやトラブルに対応する力】を高めていくことや【学校から地域へ連続した性教育】を展開することの必要性が明らかになった。

Abstract

The present study was designed to identify the views of support staff on male-female relationships among mentally-disabled adolescent girls, and examine ways to promote practical education in collaboration with the community. We conducted a semi-structured interview with support staff regarding the following points: 1) their opinions on/responses to mentally-disabled adolescent girls becoming interested in boys; 2)

the importance of/methods for continued education, and conducted a qualitative analysis of the resulting data. It was suggested that male-female relationships among adolescent girls with intellectual disabilities essentially involve high risks. It is important to help them develop the ability to deal with risks and troubles as part of practical education, and provide integrated education through collaboration between schools and the community.

キーワード：支援者、知的障害者、男女交際

Keywords: Support staff, Mentally-disabled, Male-female relationships

Ⅰ．はじめに

宮原らの調査によると、知的障害児の性的発達、性教育についての考え方では、約８割の人が「普通に発達する」「性教育は必要である」と回答している[1)]。筆者は現在勤務している特別支援学校において、人間としての生き方、関わり方を学ぶ教育として系統的・段階的な性教育の実施に向けて取り組んでいる。また、知的障害者が将来の生活において、支援を受けながらも豊かに過ごし社会的な自立に向けて、主体的に生きる力を培うことを目的に、“命・自己肯定感・生きる力”を柱に置いた授業の展開を行っている。

知的障害者は、性的成熟に伴う身体的発達に対して理性の発達が未熟であり、性的欲求をコントロールする力が弱いと思われ、これまで抑圧的な扱いが行われてきた。このような人権侵害をなくすためには、地域と連携した生きる力を育む教育を展開していくことが重要となると思われる。

知的障害のある青年期女子に関する研究としては、授産施設における知的障害を持つ成人女性の性知識として、男女の体と心の発達、生命誕生のしくみ、対人関係と社会生活の３領域に関する質的研究は行われている[2)]。しかし、支援者が捉えた知的障害者のある青年期女子の男女交際は明らかにされていない。

Ⅱ．研究目的

支援者が捉えた知的障害のある青年期女子の男女交際を明らかにし、地域と連携した生きる力を育む教育への示唆を得ることを目的とした。

本研究における、支援者とは、生活・就労支援や居住支援を通して知的障害のある青年期女子と関わっている者とする。

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

質的帰納的研究

２．対象者

入所更生施設・入所授産施設・通勤寮・グループホーム等に勤務している支援者

３．データ収集方法

半構成的な質問による面接を行った。場所は、プライバシーの守れる個室で行った。時間は、１人６０分程度とした。内容は、対象者に許可を得てテープレコーダーに録音し、対象者ごとに、逐語録を作成した。しかし、録音を断られた場合は、インタビュー中に記録を取ることについて許可を得た。

４．データ収集期間

平成２０年６月１３日～７月３０日

５．データ分析方法

知的障害のある青年期女子の男女交際と地域と連携した生きる力を育む教育に焦点をあて､データを分析しカテゴリー化した｡さらにカテゴリー間の類似性や関連を検討した。

６．倫理的配慮

各施設長から対象者選出の協力を得たうえで､研究者が対象者に､研究の趣旨を説明し、同意が得られた人のみを対象とし、研究参加の同意書に署名、捺印を得た。研究参加は自由意志であり、拒否の権利があること、途中であっても中断ができること、得られた情報は研究以外の目的で使用しないこと、得られたデータは個人を特定できないように取り扱うこと、研究成果の公表はプライバシーを厳守し、個人が特定できるような形での公表は行わないことを保障する内容を盛り込んだ。また、同意書、録音テープ、記録、集計データは、外部者の目に触れないように大学内で保管し、全て別々に鍵のかかる保管庫で厳重に管理し、個人情報の保護に努めた。研究発表終了後、同意書、記録、集計データはシュレッダーにかけ、録音テープ、フロッピーディスク等は破棄し、担当教授の責任において全て処分することを伝えた。

なお、本研究は、Ｋ大学医学部倫理委員会の審査の承認を受けて実施した。

Ⅳ．結果

１．対象者の概要

本研究の対象者は、入所更正施設・入所授産施設・通勤寮・グループホーム等で勤務し、支援度の低い知的障害のある青年期女子に関わった経験のある者１０名であった。

２．分析結果

支援者の捉えた男女交際と地域と連携した生きる力を育む教育は３つのコアカテゴリーが明らかになった。

表１　男女交際と生きる力を育む教育

コアカテゴリー	カテゴリー
１）リスクの大きい交際	（１）かかる負担が大きい
	（２）コントロールできない性行動
	（３）判断力の弱さと性被害
２）リスクやトラブルに対応する力	（１）リスクやトラブル防止

	（２）具体的な避妊方法の提示と活用
３）学校から地域へ連続した性教育	（１）連携を通しての卒業後教育
	（２）地域での性教育の方向性

支援者が捉えた知的障害者の男女交際と地域と連携した生きる力を育む教育は、３コアカテゴリー（以下【】で示す）、７カテゴリー（以下〈〉で示す）、１５サブカテゴリー（以下《》で示す）より構成されていた。（表１）

次に、これらの３つのコアカテゴリーについて説明する。

１）リスクの大きい交際

【リスクの大きい交際】は、３カテゴリー〈かかる負担が大きい〉〈コントロールできない性行動〉〈判断力の弱さと性被害〉から構成されていた。（表２）

表２　【リスクの大きい交際】

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
１）リスクの大きい交際	（１）かかる負担が大きい	①女性に負担がかかる交際
		②中絶による負担
		③誤った情報による交際
		④妊娠に対する自覚と責任
	（２）コントロールできない性行動	⑤現代の若者と同じつきあい方
		⑥身体を大事にできない
	（３）判断力の弱さと性被害	⑦マナーやルールを守れない交際
		⑧性の被害者になりやすい

（１）かかる負担が大きい

〈かかる負担が大きい〉は、４サブカテゴリー《女性に負担がかかる交際》《中絶による負担》《誤った情報による交際》《妊娠に対する自覚と責任》が抽出された。

①女性に負担がかかる交際

支援者は「責任は取れないと、残されたのは女性と子どもだけ、その時は修羅場ですよね。」「・・・女性の身体はね、どこで傷つくかわからないし、欲しいと思った時にはできなくなるからね。」というリスクを伴う交際などについて述べていた。

②中絶による負担

支援者は「本人の意思はそうでしたが、相手が誰なのかわからない・・・」「色々な事情でおろす人がいるわけですが、結婚していない自分のそういう風な行為で・・・」という中絶をせざるを得ない状況や「何回か失敗して病院に連れて行った（中略）その中で懲りもせずに・・・」という中絶に対する知識不足のことや「２人で考えてのことだったらいいですが、どうしても、女の子は、１人で担っていくことになる・・・」という中絶に伴うリスクのことなどについて述べていた。

③誤った情報による交際

支援者は「近くで連絡があったり、遊びにきてくれたり、そういう風な形の私たちがわかりやすい、相手の存在がわかると・・・」というような安全な交際を望んでいるのに対して、「仕事場と

生活の場所の往復だけではおもしろくないと、誰か遊び相手はいないか・・・」と知的障害者の出会い系サイトによる相手の存在がわかりにくい誤った情報による交際などについて述べていた。

④妊娠に対する自覚と責任

支援者は「やっぱり、妊娠をしてました。（中略）それでも、本人は違うと言い切るのですよね。」という望まない妊娠や「妊娠を今までしなかったから、まさかするとは思いませんでした。」「妊娠したら困る場面はいっぱいあります。」という妊娠に対する自覚のなさなどについて述べていた。

（２）コントロールできない性行動

〈コントロールできない性行動〉は、２サブカテゴリー《現代の若者と同じつきあい方》《身体を大事にできない》が抽出された。

①現代の若者と同じつきあい方

支援者は「卒業された同級生、先輩後輩の中で特殊な感情が生まれて男女の関係までというケースで進んで・・・」という健常者と変わらない交際や「彼ともつき合いをしているし、肉体関係もあるし、結婚も前提にしているし、目標も定まっているというつき合い方をしているし・・・」という将来を考えた交際などについて述べていた。

②身体を大事にできない

支援者は「目先の好きな男の子と遊びに行きたい。興味のある性交渉、セックスをしてみたいという誘惑の方がもっと大きい・・・」「その情熱に押し切られるというか、引っ張っていかれるというか、それをセーブする、まだ早いとか、まだいけないとか・・・」などについて述べていた。

（３）判断力の弱さと性被害

〈判断力の弱さと性被害〉は、２サブカテゴリー《マナーやルールを守れない交際》《性の被害者になりやすい》が抽出された。

①マナーやルールを守れない交際

支援者は「ある意味行き過ぎる、人前で周りが一切気にならない状態で・・・」という性行動に対するマナーや「マナーを守らないためにトラブルがどうしてもあって・・・」というマナー違反によるトラブルなどについて述べていた。

②性の被害者になりやすい

支援者は「外へ一歩出れば、私たちの目が届きません」という性の被害者になりやすい状況や「誘われたり、・・・ついて行ってしまいそうな」という拒否ができないことなどについて述べていた。

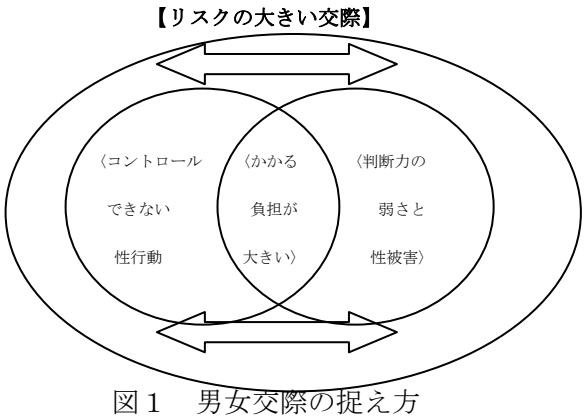

図１　男女交際の捉え方

２）リスクやトラブルに対応する力

【リスクやトラブルに対応する力】は、２カテゴリー〈リスクやトラブル防止〉〈具体的な避妊方法の提示と活用〉から構成されていた。（表３）

表３　【リスクやトラブルに対応する力】

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
２）リスクやトラブルに対応する力	（１）リスクやトラブル防止	①自分の身体を守る
		②自分なりの考えを持つ
	（２）具体的な避妊方法の提示と活用	③避妊に対する考えを持つ

（１）リスクやトラブル防止

〈リスクやトラブル防止〉は、２サブカテゴリー《自分の身体を守る》《自分なりの考えを持つ》が抽出された。

①自分の身体を守る

支援者は「相手の人がやさしくていい人でも、女の子だけが目的っていう人もいるから、そういうことを含めて言いました・・・」「その痛みを忘れたらいけない。何回も同じことをすることではないと･･･」「病院の先生に来てもらって、こういう風になるよという病気のことであるとか･･･」「コンドームを使わなかったら、こういう性感染症もあるし、望まない妊娠もあるという所を今回はやったのですが。」という自分の身体を理解することの大切さや「世間一般的なことを例に挙げさせてもらって、自分が人前でやっていることを他の人がしていたらどう思うかと・・・」「つき合いの中で、建物の裏、公園、トイレなどですることがあったが、社会的に恥ずかしい行為であることを教えている。」「マナーが軽率であったり奔放であったり、積極的過ぎたりなど、そういうことを機会あるごとに細かく教えていきたいと思っています。」というマナーやルールを教えることや「そういうつき合いに対しては、制限より危険性を本人に話をしないといけないと思って・・・」という危険性やトラブルのことや「やっぱり、女性の身体ってデリケートだし、色々あるので、性教育だけでなくて、もっと大きな意味で不安を持っている子もいると思います。」という女性の身体に関する健康相談の必要性や「別の人がこんなことで困ったという話もあった方がいいのかなと。どうしてもリスクが実感できない、いくらその話をしてもそのこと事態を理解できない、体験していないので・・・」というリスクに対する理解などについて述べていた。

②自分なりの考えを持つ

支援者は「やっぱり、小規模でわからないことを最後まで教えてもらえるという感じに持っていけたらいいと思います」「女の子だけで話し合いをするとか・・・」「ディスカッション通して話し合うことは、必要になってくるかもしれませんね。」というグループディスカッションによる自分たちでの話し合いや「答えられる範囲はお母さん的なレベルで世話人さんが答えて・・・」という生活の中での性教育や「・・・もう少し突っ込んだ個人的なお話になっていくと思います。」「・・・社会に出て、あまり一カ所に集めてというのはどうかと思います。」という個別的に具体的な性教育の必要性や「相談があれば、向こうからも言ってくるし・・・」という相談を通しての性教育などについて述べていた。

（２）具体的な避妊方法の提示と活用

〈具体的な避妊方法の提示と活用〉は、１サブカテゴリー《避妊に対する考えを持つ》が抽出された。

①避妊に対する考えを持つ

支援者は「今欲しくない、もうちょっと２人で遊びたいと言ったときには避妊方法を教えます。」や「だから普通に避妊だけのことを言っても。それが、いざというときに、自分の中できちんとできる・・・」という実際の場での避妊の必要性や「割とね、生理不順の人が多くて、それは当てにしてはいけない。コンドームつけないといけないと言うけど、言えないっていう人もいたりして・・・」という避妊に対する自覚のことなどについて述べていた。

３）学校から地域へ連続した性教育

【学校から地域へ連続した性教育】は、２カテゴリー〈連携を通しての卒業後教育〉〈地域での性教育の方向性〉から構成されていた。（表４）

表４　【学校から地域へ連続した性教育】

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
３）学校から地域へ連続した性教育	（１）連携を通しての卒業後教育	①課題に応じたチャンスと時期
		②卒業後教育の方向性
	（２）地域での性教育の方向性	③施設における性教育の方向性
		④実態に応じた指導

（１）連携を通しての卒業後教育

〈連携を通しての卒業後教育〉は、２サブカテゴリー《課題に応じたチャンスと時期》《卒業後教育の方向性》が抽出された。

①課題に応じたチャンスと時期

支援者は「きっかけがあれば、話はできるのですが（中略）自分たちでグループワーク、ワークショップという形式で勉強会をやったことがあります。」「身近な話題からどう思うかということから、段階を踏んで・・、やっていければ・・」という性教育のチャンスや「まだ男性と交際していない時に聞いた話と、いざ男性が横にいる時に必要な情報っていうのも違ってくるのかなと思いますね。」「本当に考え方も、学校の時はこう思っていたけど、今、話を聞いてこう思うとか、気持ちの変化とか考え方の変化とかも、もしかしたら生まれるのではないかと。」という性教育の時期や「課題というか、今まで目を背けていたものなので。やっぱり、その人たちの恋愛も否定できないと思います。気持ちも。」という今まで目を背けていた課題であったことなどについて述べていた。

②卒業後教育の方向性

支援者は「やっぱり、正しい知識を身に付けるためには、学校での教育と社会に出てからの教育のお互いにいい所を持ってやるのはいいかもしれないですね。」「土日は仕事の休みが多いので、（中略）学校の区別なく関わっていく方法なども考えて欲しい。」という卒業後教育の進め方や「障害者も、生涯教育の中であるといいと思いますね。例えば、レクレーションでも音楽でも、そういう話、結婚とか、男女交際とか、育児に関することを教えてくれる所とか。」という生涯教育の中での性教育や「卒業されて社会に出て色々なことに直面しますが・・・」という卒業後の課題などについて述べていた。

（２）地域での性教育の方向性

〈地域での性教育の方向性〉は、２サブカテゴリー《施設における性教育の方向性》《実態に応じた指導》が抽出された。

①施設における性教育の方向性

支援者は「所属している集団ですよね。施設であり、グループホームであり、その人の所属している、一般社会に行ったら全然そういう話はしてくれませんよね。」という施設単位の性教育の必要性や「自分たちだけでは、個人、近すぎるというのもあるので、外部の方が協力していただける方がおれば、一緒になってやれば、利害関係っていう意味でも。」という性教育の専門家を求めていることなどについて述べていた。

②実態に応じた性教育

支援者は「講習会みたいなのを青年学級でやっても、たぶん授業の延長みたいな形、実際に自分に関係ない世界であれば。」「受けて聞くだけっていうのは入ってないような気がします。」「いわゆる授業のような形で大上段で行ってもね。なかなか、頭に入らないと思いますし、本人もそういう自覚がないですよね。」という実態に応じた講習会でなければ意味がないことや「折りに触れて、何回か言って、ずっと覚えている子はおりませよね。ましてそれが身に付く訳ではないので。う～ん。」という指導の難しさなどについて述べていた。

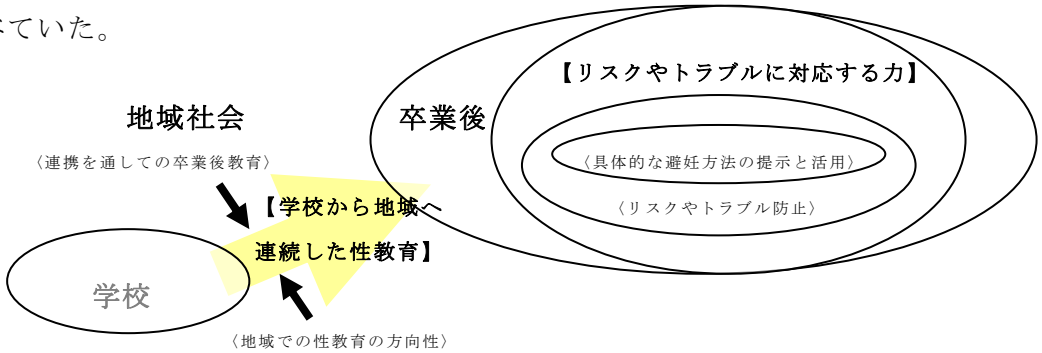

図２　生きる力を育む教育

Ⅴ．考察

知的障害のある青年期女子の男女交際において、【リスクの大きい交際】が課題として根底に存在し、生きる力を育む教育において、【リスクやトラブルに対応する力】を高めていくことや【学校から地域へ連続した性教育】を展開することの必要性が明らかになった。これらのコアカテゴリーについて考察する。

１．リスクの大きい交際

１０代の人工妊娠中絶率の推移ついては、様々な場面で言われており、今回の研究でも、望まない妊娠による中絶の実態が明らかになっている。障害の有無に関係なく、思春期を迎える頃から、異性に関心を持つことは当たり前のことであり、学校生活の中でも男女交際の場面に出くわすことも多々あるが、二人で話し合える関係を築いていくことや自分の交際に対する考え、“自分の身体を大切にする”こと等を土台においた交際の中で、責任を持つとはどういうことなのかを考えていけるような働きかけが重要となる。しかし、この責任というのは非常に難しい部分であり、自己決定に伴う責任とも結びついてくることであるが、サポートしていく上で重要な部分となると考える。また、知的障害のある青年期

女子が、つきあう相手と十分な関係性を結べないままのセックスをしてしまうなど自分自身の生き方に対する考え方の未熟さが窺えるが、これらに対して、自己本位な行動にならないように、性行動とくにセックスをすることで起こり得る結果についても、日頃の関わりの中で一緒に考えていく必要がある。また、彼女たちの性行動は、最近の若者の性の特徴とも重なる部分も多く、お互いの置かれている状況を理解せず、お互いの同意があれば安易にセックスをする傾向や中絶によるリスクが十分に理解されていないことや男女の関係性のもろさや自己肯定感の低さのためか“自分の身体を大切にする”ことができず、お互いに避妊に対する意志確認ができずに中絶を繰り返してしまうという現実がある。同じ失敗を繰り返さない、繰り返させないために、二人で失敗の原因を検討し、リスクの軽減に繋げられるように、どんな避妊法がいいのかを考えていけるような働きかけが必要であると考える。

出会い系サイトでの交際は、知的障害者が軽い気持ちで相手を求めていくことがリスクへ結びついてしまう結果となっていることが窺える。出会い系サイトについては、学校現場でも卒業前の性教育の中には展開しているが、興味本位に駆り立てるマスコミなどからの不確かな性情報をよりわける力：メディアリテラシーも必須となる[3)]。そして同時に、出会い系サイトへのきっかけなども考えるとリスクだけを取り上げるのではなく、活動範囲の拡大や生活や余暇の場での充実を考えていかなければならない。

興味本位な性行動により“自分の身体を大切にする”ことができていない実態も明らかになっているが、ここで支援者に重要になるのは、命・自己肯定感・生きる力を柱にした性教育の土台について、彼女たちと一緒に考えることや性行動が表出する背景やその行動の意味を的確に捉える[4)]ことの必要性が確認された。

また、知的障害者はその場に応じた判断力の弱さがあり、性被害にあった知的障害者のケースでは、脅迫やあるいは力ずくなどによる行為に対して“ノー”と拒否できない結果、性の被害者になりやすいというリスクに繋がってしまう可能性がある。彼女たちに“自分の身体を大切にする”という認識を高められるように、また意思表示の大切さも繰り返し教えながら関わっていく必要がある。

２．リスクやトラブルに対応する力

支援者が述べるように、“自分の身体を守る”ことが基底にあってこそ、相手を大切に思う気持ちや態度に結びつくと考える。その中で社会に受け入れられるような表現方法を学ぶことや男女交際における行動の取り方を考えさせること、そして、仲間や支援者との間で、自分を振り返り話しあうことができるように、卒業した子どもたちが学びあう場を設定できるように、地域へ働きかけていくことが必要であると考える。また、性教育を進めていくにあたってディスカッションや相談を通して、みんなで考え合い、話し合うなど自由な意見交換を通して、子どもたちがリスクやトラブルについて自分なりの考えが持てるような関わりも必要であり、個人の持つ能力をエンパワメントすることが大切であると考える。

また、支援者は、避妊の大切さについても切実に述べており、性交には妊娠が伴うこと、自分の行動がどのような結果をもたらすか、相手にどのような影響を与えるか話しあうことを通して、避妊に対する自覚を持ってもらいたいと考える。また、知識をどんな場面でいかしていくのか具体的に教えながら、必要な行動を取ることができるように繰り返し教

え、その場で女性自身が自己主張し、確かな避妊方法が取れることが大切であると考える。

３．学校から地域へ連続した性教育

学校での性教育と社会に出てからの性教育の連携を通す教育の繰り返しが大切であると捉え、学校と社会が共有しながら卒業後教育の方向性を考えていく必要がある。そこで、学校としては、卒業した子どもたちに対して、同窓会やサークルや余暇活動に組み込んだ性教育や相談の場を作っていくことが必要であると考える。また、支援者は、施設での性教育では専門家の協力を求めており、現状として模索している段階であると捉えることができる。地域で生活する中、軽度知的障害を持つ女性の性知識[5)]の研究において、地域で働く看護職は、対象者個々の成長・発達をみていく過程で、対象者の性知識をアセスメントし、適切な時期に、対象者に必要な性知識を提供していくことが重要であると述べられているように、地域の保健師等は公助として施設での性教育を支援し、各施設単位で共助の力を高められるように、そして、学校と施設は連携を通して、子どもたちの自助の力を強化できるように、ヘルスプロモーションの視点で性教育が進めていけるような働きかけが必要であると考える。そして、養護教諭の専門性を学校で生かす環境整備や学校と家庭・地域社会との連携による学校保健活動の充実[6)]図ると共に、特別支援学校のある地域の共通課題としての認識を持つことも必要だと考える。

４．学校保健から地域保健の連携における養護教諭の役割

１）生きる力を育む教育として、小・中・高と系統立てた授業展開ができるようにコーディネートする。

２）卒業後に向けてのセクシュアリティに関するサポートブックを作成する。

３）施設や地域が抱える男女交際の課題を話し合う場の設定や学校から地域へ連続した性教育の展開に向けて、福祉保健所や市町村の母子担当保健師と連携を図る。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました支援者の皆さま、ご支援くださいました関係者の方々、論文作成にあたり、ご指導くださいました教授に心から感謝いたします。

なお、本研究は、Ｋ大学医学系研究科看護学専攻の修士論文の一部を修正・加筆したものである。

引用文献

１）宮原春美．相川勝代，知的障害児・者の家族のセクシュアリティに関する調査，長崎大学医療技術短期大学部紀要，１４巻１号．２００１；６４．

２）長浜亜希子，地域で生活する・軽度知的障害を持つ女性の性知識，母性衛生，４３巻２号．２００２；２９２－２９９．

３）高村寿子（２００４），性：セクシュアリティの看護，建帛社，東京；６６．

４）長浜亜希子，知的障害者の性行動とそれに関わる指導員の対処，北海道医療大学看護福祉学部紀要，ＮＯ．１０．２００３；２２．

５）前掲２）２９８．

６）采女智津江，中央教育審議会答申及び学校保健法の改正の概要，小学保健ニュース，８６２号．２００８；２．